

惠林寺便り



大道透長安

だいどうちやうあん とお
大道長安に透る

一人の僧が、趙州和尚じやうしゆうに尋ねました。

僧：「如何なるか是れ道」(道とは、どのようなものでございましょうか?)

趙州：「牆外底」じやうげてい(道か、そら、その垣根の外じゃ)

僧：「恁麼の道を問わず。如何なるか是れ大道」(そんな道のことじゃあり

ませんよ。修行の大道のことを訊いているんです)

趙州：「大道長安に透る」(大道か、そりゃ長安に行く道じゃ)

「大道長安に透る」... 有名な句ですので、ご存じの方も多いかと思ひます。

修行僧は、修行者の歩むべき道、仏道のことを尋ねます。すると趙州和尚は、すぐそばの、垣根の外を通っている小道の方を指さして応えます。

「道か、そんなもんなら、そら、そこにあるじゃないか」... 質問をはぐらかされたように感じた僧は、自分が訊きたいのは修行者が歩むべき道、真理の大道なのだ、と食い下がります。すると趙州和尚の答えは、「大道、だったら、そりゃ長安に通じている道のことじゃな」と言うのです。

古代のローマでは、政治上、戦略上の理由から、太い幹線道路はすべて首都、ローマに繋がるように作られていたといひます。

「すべての道はローマに通ず」とは、商人も、役人も、旅行者も、軍隊も、あらゆる旅人がそこを通る石畳の立派な街道が及

ぶところ、そこがすべてローマの支配の下にある、ということ
を誇示していたのです。

同じように、中国にあっても、隋の時代に作られ、例えば唐の
玄宗皇帝の時代には世界最大の国際都市であった長安は、
ローマと同じように、すべての主要道路が集まる街だった
のです。ですから、修行者の「大道」という言葉を捉えて趙州和
尚は、「大道だったら、長安に繋がる大通りのことじゃ」、と
応えるのです。



修行僧は、修行者の歩くべき道、人の生きる道、真理の道を問
いかけます。しかし、趙州和尚は、あくまでも現実の生活の中
で、私たちがいつもそこを通る、ありふれた道、普通の道のこ
ととして答えています。

もちろん、断るまでもなく、趙州和尚は修行者の質問の意図を
理解しています。そして、修行者の真剣な問いかけに対して、
同じく真剣に答えているのです。決して、ふざけているわけ
でも、はぐらかしているわけでもないのです。

それでは、修行僧が問いかけているような修行の本道、真理の
大通り、絶対の大道は、一体どこにあるのでしょうか？

この問いに、はっきりと答えるとすれば、「大道は、自分で歩
んでいく以外にない。自分が歩んでいる道が、長安に通じてい
る大道であるのか、行き止まりの隘路^{あいろ}であるのか、自分自身で
歩いて確かめていく以外にはない」という答えになります。
誰もが、人生において、自分の道を歩いています。親の言いな
り、人のいいなりの生き方の人であっても、そういう形で、自
分の道を歩んでいるのです。人の指示に従おうと逆らおうと、

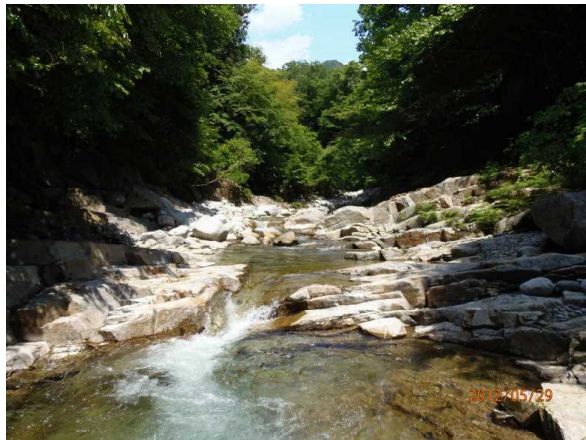
実際に歩くのは自分自身なのですから。こればかりは、他人に代わって貰うわけには行きません。

そして、誰もが人生において大なり小なり、苦勞と失敗を積み重ねてきているわけです。だからこそ、他人のことであっても、自分が苦勞したり、失敗したりしたのと同じ道を歩んでいる人が居たら、それがどこへ繋がっていくのかわかるはずですよ。

しかし、それであっても、ある人にとってはただの失敗、ただの苦勞が、別の人にとってはそれが次の挑戦のチャレンジになり、飛躍へのきっかけになることがあるわけです。その経験を生かすか、殺すか、それはその人自身の力にかかっているのです。

趙州和尚の答えは、まさしく、この点にかかっているのです。修行僧が尋ねている大道とは、めいめいが、迷いながらも自分自身で歩いていくほかない道です。そんなものを、人に尋ねているようではどうにもならないのです。

趙州和尚の答えは、誤解を恐れず敢えて解説してしまえば、「修行の大道か、そりゃ、おまえが自分で今歩いているその道以外にはないぞ、垣根の向こうの道とも思えない道だろうと、茨道いばらみちであろうと、袋小路であろうと、迷いながら今歩いている道が、大道だ。楽をして、他人に道を求めるな。



自分のいる茨道を、自分の力で大道に変えて、自分の力で長安にたどり着け。あきらめたり、投げ出したりしなければ、どんな道であろうと、最後は大道に、そして長安に繋がっているのだ」というものなのです。

ですから、やはり、こんな余計な解説を加えると、趙州和尚にどやされそうですね。

「こらっ！ 自分で気がつかせにゃあかんところを、おまえさんが余計なことを言うな！」と...



趙州和尚の怒鳴り声が聞こえて来そうですけれども、乗りかかった船、さらに続けければ、こうです。

要するに、あきらめずに道を歩いていけば、苦勞にせよ、失敗にせよ、それを通じて、自分を高め、飛躍す

るための糧にすることができる... それならば、大道だの、隘路だのといった区別は余り意味を持たなくなってくるのです。自分が進むべき大道がはっきりとは見えない時、細道でも良い、一見けものみち獣道のように見えるところでも良い、その時点で自分が正しいと思う道を一心に進む... 目的地、長安に最短距離で直接繋がる公道に、最初からなんの苦勞もなく歩み入ることのできる人間など、どこにもいないのです。

ぐるぐる周りをしたり、後戻りをしたり、しかし、あきらめな^{みやおおじ}いで試行錯誤をしていけば、必ず都大路に行き当たるものです。実際、どんな細いごちゃごちゃした道でも、道であるからには、どこを通ろうとも、最終的には長安への大道に合流していくものです。「すべての道は、大道に通ず」のです。そして、ひとたび大道に至りついたら、後はまくじきこうぜん驀直向前、まっしぐらに長安に向かって走り抜ける...

長安は、首都であり、帝都です。唐であれば、皇帝がおられるところ。もちろん、禪語として受け止める時には、皇帝とは「現世の支配者」ではありません。

至高至極しいごくの存在、最も大切なもの、ぶれることない、最高最上の存在... 私たちめいめいにとっては、私たちの生き方をぶれることなく支え、一本筋の通ったものにしてくれるもの、私た

ちの中にある、「本来の自己」、仏教の言葉で言う、「仏性」、「仏心」のことです。

「大道長安に透る」とは、別の言い方をすれば、どこにいようとも、そこは常に大道に通じ、そして大道は、長安に透っている。だから、今、自分が立っているその場所こそが、大道なのだ。たとえ自分が迷って途方に暮れている、その最中にいようとも、全力を尽くし、進むべき所に向かって進んでいく... それ以外にはないのです。

修行僧の真摯な問いかけに対する、一見冷淡で、はぐらかしているように見える趙州和尚の答えは、実は、真剣に相手に向き合って、修行の本道、真理の大道を示してやろう、という熱い思いに満ちた、まさしく真剣そのものの答えですし、厳しい教えなのです。

趙州和尚の教えを、一言で言えば、「道がわからないからといって、きよろきよろするな、人に訊くな、一步一步、わからなくとも自分で迷いながらしっかり歩け！」という所でしょうか。苦しい自分の歩みを離れて、ことさらに「大道」を求めることは、そもそも間違っているのです。今、一步一步、歩いている自分の足の運びを抜きにして、大道に至ることなどないのです。



私たちも、苦しい時こそ、よそ見をせず、まっすぐ、一心に歩んでいきたいものです。

惠林寺便り

大道透長安 だいてうちようあん とお 大道長安に透る



一人の僧が、趙州和尚じょうしゅうに尋ねました。

僧：「如何いかなるか是れ道」(道とは、どのようなものでございましょうか?)

趙州じょうげい：「牆外底」(道か、そら、その垣根の外じゃ)

僧：「恁麼いんもの道を問わず。如何なるか是れ大道」(そんな道のことじゃありませんよ。修行の大道のことを訊いているんです)

趙州：「大道長安に透る」(大道か、そりゃ長安に行く道じゃ)

「大道長安に透る」... 有名な句ですので、ご存じの方も多いかと思います。

修行僧は、修行者の歩むべき道、仏道のことを尋ねます。すると趙州和尚は、すぐそばの、垣根の外を通っている小道の方を指さして応えます。

「道か、そんなもんなら、そら、そこにあるじゃないか」...

質問をはぐらかされたように感じた僧は、自分が訊きたいのは修行者が歩むべき道、真理の大道なのだ、と食い下がります。

すると趙州和尚の答えは、「大道、だったら、そりゃ長安に通じている道のことじゃな」と言うのです。

修行僧は、修行者の歩くべき道、人の生きる道、真理の道を問いかけます。しかし、趙州和尚は、あくまでも、ありふれた道、普通の道のことを答えています。

もちろん、趙州和尚は修行者の質問の意図を理解しています。そして、修行者の真剣な問いかけに対して、同じく真剣に答えているのです。

修行僧が尋ねている「大道」は、言ってみれば私たちが歩いて行く人生の道です。そして、誰もが、人生において、自分の足で自分の道を歩いていかななくてはなりません。親の言ひなり、人のいいなりの生き方の人であっても、そういう形で、自分の道を歩んでいるのです。

趙州和尚の答えは、まさしく、この点にかかっているのです。修行僧が尋ねている大道とは、めいめいが、迷いながらも自分自身で歩いていくほかない道です。そんなものを、人に尋ねているようではどうにもならないのです。

目的地、長安に最短距離で直接繋がる大道に、最初からなんの苦勞もなく歩み入ることのできる人間など、どこにもいません。

趙州和尚の教を一言で言えば、「道がわからないからといって、きよろきよろするな、人に訊くな、一步一步、わからなくとも自分で迷いながらしっかり歩け！そして、自分で自分の道を、長安に至る大道にせよ！」ということなのです。

